広　告　企画・制作 読売新聞社広告局

海外プロジェクト 探検隊
～世界の仕事現場を見に行こう!～

第13回 アメリカ合衆国

後列左から
森下 瑞紀（もりした みずき）さん　東京都立小石川中等教育学校5年
小林 龍之介（こばやし りゅうのすけ）さん　早稲田大学高等学院2年
村山 晶彦（むらやま あきひこ）さん　武蔵高等学校2年

前列左から
小川 夏生（おがわ ないき）さん　神田女学園高等学校3年
谷口 朋（たにぐち とも）さん　福井県立藤島高等学校2年
佐藤 詠美（さとう えいみ）さん　渋谷教育学園渋谷高等学校2年

持続可能な生活と産業
高校生が米国全力取材

三菱商事の海外ビジネス最前線を高校生が訪問・取材してリポートするシリーズ企画「海外プロジェクト探検隊」。第13回となった今回ツアーは8月24日から29日まで実施され、東京都、千葉県、福井県在住の6人が参加した。「サステナビリティー」（持続可能性）に配慮したビジネスとは何なのか。探検隊一行は米国カリフォルニア州に飛び、三菱商事が資本業務提携する農産物事業会社「Olam International Limited」（以下、Olam社、シンガポール市場上場）のトマト、アーモンド農場など生産現場を巡った。

「責任ある成長」で飛躍
三菱商事 Olam社と提携

成田から空路、ロサンゼルス経由で到着したフレズノはカリフォルニア州の中央部分に位置する。夏の陽光が容赦なく照りつけるが、雨がほとんど降らないとあって、カラリと爽やかな空気感にあふれる。道の両脇にはアーモンドやトウモロコシ、ワインの原料となるブドウなどの農地が広がる。

この豊かな農業地域でOlam社は、トマト、アーモンド、タマネギ、ニンニクの生産・販売を手掛ける。三菱商事Olam事業部の高橋頼輝さんの案内で、Olam社の加工用トマト農場に到着した。

「ええっ？広い……」。高校生たちは思わず息を飲んだ。巨大な収穫機が轟音をあげながら、大地をはうように実るトマトを刈り取って行く。収穫機の向かう先に目をやれば、トマトの赤に葉と茎の緑、そして大地の黒が混ざり合って、かすむ地平線へ消えていく。日本ではなかなかお目にかかれない光景だ。

この農場は総面積約65㌔。毎年7～9月の収穫期は、24時間ノンストップで作業が行われ、一日あたり2000㌧もの収穫をあげる。

暑く乾燥した気候にあって、スプリンクラーも用水も一切見あたらない。なんだか奇妙な光景に思えたが、作物への給水は100％「ドリップ灌水システム」を使用していると聞き、みんなが納得した。給水チューブが埋設され、センサーが水の状況を常時チェックし、過不足無く灌水される。水の節約に最大限配慮した優れたシステムだ。この広大な土地をタブレット端末1台で管理できるという。

Olam社スタッフの説明に聞き入る高校生

トマト農場に入って取材する高校生

トマトの収穫に合わせてフル稼働中のトマト加工工場を訪れた。ここでも使用する水への配慮が行き届いている。トマトを加工する過程で発生する水蒸気を、さらに熱処理するためのボイラーに有効利用していることなどを聞かされた。

次に訪れたアーモンド農場では、節水対策はもちろん、害虫駆除として天敵である益虫を放つなど、農薬使用量低減のための対策が講じられていた。Olam社のアーモンド生産は世界第2位。業績の背景には、こうした環境への行き届いた配慮がある。

小川夏生さん（神田女学園高校）は「環境問題に真剣に取り組むことで信用を得て利益を生み出している。企業、地域が『Win-Win』関係にあるのは大切ですね」と話した。

Olam社は1989年にナイジェリアで創業した企業だが、現在は世界70か国で事業展開し、47品目の商品を取り扱う大手農産物事業会社。特にコーヒー、カカオ、ナッツ類は世界トップクラスのシェア（占有率）を誇る。環境にも労働者の人権にも配慮し、農業生産から加工まで持続可能なバリューチェーンを構築している。

同社によれば「責任ある成長」がビジネスの基本姿勢。「倫理的で社会責任を持ち、かつ環境的に持続可能なやり方での利益追求が信条」だ。

複合的なサステナビリティーを推進する同社のこのスタンスは、同じく経済、社会、環境の三つの面から「継続的企業価値」創出を目指す三菱商事の企業理念と重なる。両社が2015年8月、資本業務提携を締結した理由だ。

高橋さんは「Olam社は様々なビジネスのチャンネルを持つ。両社が強みとする商品、地域、事業領域を合わせることで、さらなる事業展開が望める」と説明する。

村山晶彦さん（武蔵高校）は「サステナビリティーは世の中を良くしていくために必要なこと。日本の企業がその活動と概念を普及していく一翼を担っていることを知り、日本人としてうれしくなった」と笑顔を見せた。

倫理的な消費の広まり
フェアトレード商品に関心

石川斉・三菱商事ロサンゼルス支店長

Olam社取材を終えた高校生たちは、フレズノから空路でロサンゼルスへ。三菱商事の米国ビジネスの拠点の一つ「ロサンゼルス支店」を訪ねた。石川斉支店長が米国人、日本人のスタッフを紹介してくれ、ランチを食べながら、商社のビジネスについて質問をぶつけて理解を深めた。

同支店は有機栽培のコーヒー豆やカカオ、フェアトレード商品を取り扱う。実際にカカオをかじってみたり、コーヒー生豆を触ったり、フェアトレード認証ラベルの付いたチョコレートを見せてもらったりして、にわかに関心が高まった。

「有機栽培商品は値がはるが、米国人の購買状況は？」「フェアトレード商品の認知度は」など高校生たちから質問が飛び、スタッフが米国内の状況を詳細に説明していた。

米国では有機栽培商品は富裕層を中心としたトレンドだが、自然食品を多く取り扱う大型スーパー「ホールフーズ・マーケット」チェーンが売り上げを伸ばしているほか、一般のスーパーも有機栽培商品を置くようになっている。

また、より倫理的なライフスタイルを求める志向、関心が米国人全体に広まりつつあり、フェアトレード認証ラベルの付いた商品は高くても買おう、という機運が高まっている。

小林龍之介さん（早稲田大学高等学院）も「認知度が世界的に広まらなければ、優れた認証制度も意味がない。まだ知らない人と情報共有していきたい」と話した。

谷口朋さん（福井県立藤島高校）は「世界の不平等解消に向け、もっと消費行動に敏感になろうと思った。今後はフェアトレード商品に積極的に目を向けていきたい」と述べた。

ロサンゼルスでは、米国西海岸の国際貿易の玄関口であるロングビーチ港も取材した。三菱グループの日本郵船が出資する

積み荷作業が行われている YTIの港湾施設

Yusen Terminals社（YTI）を訪ね、ガントリークレーンが船に貨物を整然と積み込む様子を目の当たりにした。

また、ロサンゼルスからバスで2時間余り、リバーサイド郡の広大な荒野にそびえるセンティネル火力発電所も訪ねた。三菱商事の100％子会社であるダイヤモンド・ジェネレーティング・コーポレーション（DGC社）が運転・保守している。

三菱商事は1980年代、米国の電力事業の規制緩和に合わせて、日本企業として初めて独立系発電事業に参入した。同発電所はDGC社が米国内10か所に所有する発電所の一つ。トレーディング主体のビジネスモデルから、多くの分野で事業そのものへの運営・経営に参画することで多角的収益をあげるモデルに変化した総合商社ビジネスの一端に触れた。

電力の安定供給を担うセンティネル火力発電所

フェアトレード　開発途上国の産品を適正な価格で継続購入することで、労働者の生活向上と自立を促す貿易の仕組み。世界に多くの認証団体があり、児童労働を禁止して安全な労働環境を作ったり、自然環境に配慮したモノ作りを奨励したりしている。日本でも、食品、衣服、スポーツ用品など多くの認証商品が買えるが、認知度はまだ低い。

UCLA訪問
ダイナミックな「日本人観」を

多種多様な人種が共存することから「人種のるつぼ」と形容される米国社会。世界の学生が憧れるカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に、仙台市出身の建築家で同大建築・都市デザイン学科長を務める阿部仁史教授を訪ね、多人種社会で考えた「日本人観」「日本文化観」について意見を聞いた。

阿部教授は「固定的にとらえるより、いろいろな『日本人』がいる、と考える方が楽しい」と切り出した。自身の家族は、妻は父が米国人、母が日本人だが、英語が話せない。息子は約10年の米国暮らしで言語的にはアメリカナイズされ、まだ幼い娘は日本語しかできない。「私は典型的日本人で英語が話せます。同じ家族なのに『日本人』の幅がこんなにある」と笑った。

高校生に語りかける阿部仁史教授（右）

米国では「カリフォルニアロール」のような米国式すしが『SUSHI』として受け入れられ、本物のすしが広まるきっかけになっている。「『日本』『日本人』をダイナミックにとらえるほうが、いろいろな可能性が生まれるのではないか」と持論を披露し、高校生たちに「ぜひ、みんなも考えてみて」と語りかけた。

森下瑞紀さん（都立小石川中等教育学校）は「いろいろな価値観をもった人と積極的に交流を持ち、多様性についてもっと考えを深めなければ」と話した。

「アイスブレーク」に盛り上がった夕食会

自己表現で磨く 英会話力
臆さずに話してみよう

今回のツアーでは、英会話能力を試される場面が多々あった。

「世界中の言語が理解できるのと、動物の言葉が分かるのとではどちらがいいか」――。

Olam社員たちとフレズノのステーキハウスでの夕食会の一コマ。初対面の者同士が相手を知り、打ち解け合うための遊び「アイスブレーク・ゲーム」。仕切り役が二者択一の質問を投げかけ、それに参加者がその理由とともに回答していく。突然の英語の試練に高校生たちはたじろいだ。知りうる英文法、英単語を頭の中で組み合わせて話そうとするがなかなかうまくいかない。「ドウブツト ハナセルノガ イイカナ ウチノイヌト ハナシテミタイカラ」。たどたどしくも何とか答えるたびに社員から大きな拍手が送られた。

高校生たちが気づいたのは、試験科目の英語と会話ツールとしての英語の違いだ。コミュニケーションはとにかく自分を表現しなければ成り立たないし、紙の上の得点とはさほど関係がない。佐藤詠美さん（渋谷教育学園渋谷高校）は「乏しい英語力のため、物おじして聞きたいことも聞けない状況に陥ることがあった。英語の勉強を頑張って、堂々と話せるようになりたい」と気を引き締めた。

三菱商事ロサンゼルス支店の石川支店長から一言アドバイス。「英語がうまくなりたければ、うんとしゃべってうんと恥をかくことですよ」。高校生たちは思わずうなずいた。

高校生を世界へ　海外プロジェクト探検隊

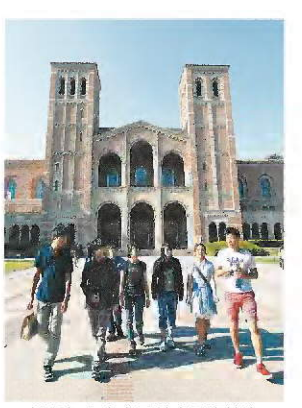
読売新聞社が日本の高校生を「記者」として選抜して海外へ派遣、現地取材や体験の内容を高校生に読売新聞や読売中高生新聞紙上などで発信してもらうシリーズ企画。

三菱商事が手がけるビジネス現場を訪問するほか、現地の人々との国際交流や社会、文化を学ぶプログラムを通じて、総合商社への理解を深め、外国文化への関心を高めてもらうのが目的だ。国際社会で活躍する人材育成に寄与することを目指している。

これまでに訪問したのは、中国、タイ、インドネシア、オーストラリア、カナダなど10か国。

◇

10月4日、第13回アメリカ合衆国ツアーの報告会が東京・丸の内の三菱商事「MC FOREST」で開催され、高校生たちは今回のツアーを通じて学んだこと、感じたことなどを発表した。


UCLA内を見学する高校生

主催：読売新聞社　特別協賛：三菱商事　後援：米国大使館